

8-5

主題 軽費老人ホーム利用者による同好会活動の立ち上げから継続に至るプロセス

利用者主体

副題 ミュージックベル同好会の事例から考える

介護予防

研究期間 7ヶ月

事業所 軽費老人ホーム サンホーム

発表者：中元 好美

アドバイザー：市川 光代

共同研究者：伊藤 華恵

電話 042-391-3274

メール Sunhome-kaigo@douen.jp

FAX 042-391-3366

URL <http://www.douen-sunhome.jp>

今回発表の  
事業所や  
サービスの  
紹介

軽費老人ホームA型（経過的）  
東村山市に位置し、特別養護老人ホームを併設。45年の歴史の中、地域に根ざす施設を目指している。持てる力への支援～潤いのある生活を楽しむ～を運営目標に介護予防に主眼を置き支援を展開している。

<研究前の状況>

近隣高校との交流でクリスマスミュージックベルの演奏を聞きに行き、感動した利用者から「自分たちもクリスマスにベルの演奏がしたい」という声が上がった。平成20年12月利用者の発案によりミュージックベル同好会（今後は同好会とする）を発足した。現在は9名で月に2回第1・3土曜日の午前中1時間練習している。

<課題>

同好会発足から1年以上経った現在も活動は継続しているが、その間メンバーの意識の相違、各自の力量の差を原因とするトラブル、「脱退したい」という相談も数回あった。その都度職員が介入したり、利用者同士の支え合いにより解決をはかってきた。

<目標>

- ・今回の研究により、同好会の活動を通してメンバーにどのような意識の変化があったのかを探る。
- ・同好会活動を継続していくために職員としてどのように支援していくことが望ましいのかを考える。

《具体的な取り組みの内容》

〈研究方法〉

- 同好会のメンバー7名にインタビューを行った。
- 処遇日誌の中から同好会の活動に関するものを抜粋し、特に心理面に注目した。
- 同好会の指導的立場にある男性利用者がつけている活動記録ノートから、心理面の記述を抜粋した。

以上の3点をもとに、同好会の立ち上げから継続にいたるプロセスを探るとともに、心理面の変化に注目し分析を行った。

〈倫理的配慮〉

同好会メンバー7名に対し、インタビュー内容をICレコーダーに録音すること、プライバシーの保護に努めること、不利益を生じさせないことなどを口頭で説明し、承諾を得た。

《取り組みの結果と評価》

- 普段の日常的な関わりではなく、一対一のインタビューを行ったことで、利用者の気持ちや感じていることを率直に語ってもらうことができた。
- 一年半に渡る活動の様子を見つめる中でメンバーの変化を感じてはいたが、インタビュー内容を分析したことでその変化を言葉で表現することができた。
- 同好会のメンバーの中でも、指導的立場にある利用者と他の参加者とは、思いや悩み、考えていることが異なっており、職員に求められる支援も違ってくるということが分かった。
- 利用者主体と言えども、職員の関わり方次第で活動の継続が可能になり、さらに活動の幅を広げていくことができることが分かった。

〈参考文献〉

- 1) 木下康人：ライブ講義M-GTA, 実践的研究法, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて, 弘文堂, 東京(2007)
- 2) 小倉啓子・木下康仁：M-GTA, ケア現場における心理臨床の質的研究, 弘文堂, 東京(2007)

《提案と発信》

サンホームでは「持てる力への支援」を運営目標に掲げ、介護予防に取り組んでいる。同好会の活動もその一つであり、園内活動にとどまらず他施設まで活動の幅を広げている。また個人ボランティアでは提供する側として利用者が活躍できるように働きかけを行なっている。役割を見つけ生きがいを持って生活いただけるよう個人の力に着目すると同時に、利用者間での相互作用も引き出せる様な支援をしていきたい。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。